

# 主張

金属労協副議長／日本基幹産業労働組合連合会 中央執行委員長 神田 健一

## 過去に学び・明日につなぐ

### 安心・安定の揺らぎ

安心・安定の揺らぎは今やわが国にとって大きな課題となつてい  
る。超少子高齢社会の到来と生産  
労働人口の減少からすれば、必要  
とされているはずの労働者の処遇  
は上向くはずが現実には矛盾するこ  
とばかり。優秀な人材確保の観点  
からも、女性、高齢者をはじめ、  
障がい者の活躍、母子、父子家庭、  
一人暮らしであっても、誰もが安心  
して働き・暮らし続けられる社会  
をつくるためのセーフティーネッ  
トの確立が急務である。

そうした観点から労働運動を捉  
えれば、組合員という個から、その  
活動領域は広がり労働組合として  
のチェック機能の強化とサポートも  
社会的役割として重要となつてい  
る。冒頭から、大上段に振りかぶつ

たが、こうした状況は多くの組合役  
員の共通するものであり、その実践  
も中々難しいということも同じ認識  
のはず。

### 労働運動の課題と対応姿勢

しかし、労働運動は常に足下と先  
を見据えた課題に取り組んできた歴  
史がある。今一度、取り組みの振り  
返りと時代状況に応じた活動の点検  
を行うことは、組織形態や組織事情  
は違つても、現役役員の大事な使命  
として意識しておかなければならな  
いことではなからうか。

複雑化しスピードを上げる時代変  
化の中で、労働組合自らが産業政策  
や政策・制度課題を提起し、政策実  
現活動とその手段としての政治活動  
も積極的に進めている。また、かつ  
ては一部の産業課題として捉えがち  
であった国際労働運動は、今や業種・

業態を問わず、むしろ連携を図り  
ながら取り組んでいかなければなら  
ない重要課題ともなっており、変化  
への対応力が求められている。そう  
した点では、あらためて旧IMF・  
JC・金属労協を創ってきた先達の  
先見性に脱帽の一言である。

一方、現実と向き合うというこ  
とからすれば、基幹労連は悔しい  
けれど忘れられない挫折も味わつ  
てきた。結成14年という短い歴史の  
中で、三度にわたり参議院議員選  
挙比例区に候補者を擁立したが直  
近の二回は惨敗を喫した。私たち  
は組織運動の在り様にも関わる課  
題として、侃々諤々の議論の末、見  
方によっては産別運動を卑下する  
とも見られるかもしれない辛い選  
択であったが、自らの力量の無さを  
率直に認め合い、次なるアクション  
を起こすこととした。

その内容は今後の活動で見えて  
いただくこととし、「失敗は成功の元」  
という言葉で思いを触れておきた  
い。今更ながらだが、この言葉の意  
味合いは、失敗することによってや  
り方を改めることができ、かえって  
成功へと繋がることになるから一度  
や二度の失敗にくじけるべきではな  
いという教えである。しかし、失敗  
してもその原因を追究しなかった  
り、やり方を改善しようとする姿勢  
がなければ、また同じような失敗を  
くり返すということを忘れてはなら  
ないということでもある。

労働組合組織においては、取り組  
みの経過報告を毎年の大会を通じ行  
なっている。決して忘れず、逃げず  
にめげずにその評価と課題を残し、  
次なる取り組みの踏み台として歩を  
進めているのである。

## 教訓は心にとめて 活かしてこそ

次元は違うが忘れてはならない教訓を活かすという点で…。今年、あの3・11東日本大震災の発生から丸7年である。目に焼き付いた悲惨な映像から半年がたった2011年9月のこと、基幹労連定期大会の議長を指名され、その時の締め挨拶として触れた言葉がある。『思い出すとは忘るるか、思い出さずや忘れねば』。これは1518年という遠い昔であるが、『閑吟集』という歌集に歌われたもの。今風に言い換えれば、「『思い出す』とは忘れていた証拠。忘れていないのなら『思い出す』ことはないでしょう。」という女性の作品。震災のあと、ある新聞のコラムが引用し、被災地・被災者の立場に立って、「大好きな故郷、父母を、愛する家族を、妻を、娘を・息子を失った」私たちの想像をはるかに超えた思いとして取り上げたものであり、私たちも決して忘れてはならない、風化させてはならないことを皆に訴えた。後に、この話に感銘を受けた後輩が調べたところ、この歌が311首ある『閑吟集』の311番目(3・11)の歌とある。

常に忘れてはならない教訓と労働組合の支え合いの大切さとして今も語り継いでいる。

## 運動の原点は変わらず

今一つ。忘れてはならないもの、教訓といえ、若いころ組合研修会で聴いた組合として恥としなければならぬ三つの言葉「格差・差別・貧困」。未だ、その言葉は存在し、国内外を問わず、その言葉がむしろ大きくなっていないかということである。ナショナルリズムに傾斜し自分さえ良ければよし、自分の眼鏡にかなわなければNO、という国際社会の動きも、このことをさらに助長している状況にある。耳にすることも多くなったであろう「SDGs」(Sustainable Development Goals) 持続可能な開発目標。その17の目標の中の1つ目が「貧困をなくそう」、3つ目には「全ての人に健康と福祉を」、4つ目には「質の高い教育をみんなに」、5つ目に「ジェンダー平等の実現」、そして8つ目には「働きがいも、経済成長も」と謳われている。まさに無くさなければならぬ三つの言葉への対抗軸ではなからうか。

これらの課題をどのように運動に

落とし実践していくのか。声を聞き、伝え、認識を一にし、相手の立場に立つて行動に移すという基本中の基本が先達の教え。基幹労連はFace to Faceの実践を課題として掲げ取り組んでいるが過去にも増してニーズは多様化し、さらにグループ・輪から個の時代へと課題は多い。

聞く・伝える運動と実践はあらゆる組織運営の基本であるが、そのための手法は様々であり、当座やらなければならぬことはアンテナを高く掲げ・センサー機能を磨くための組合教育・セミナーの充実と実践、これもよくよく考えれば基本に戻るということである。

かばす会という県人会の先輩でもあり、金属労協、連合と活躍さ



金属労協副議長／基幹労連中央執行委員長  
**神田 健一** かねだ・けんいち

1958年12月生まれ  
1977年3月 新日本製鐵株式会社 入社  
1988年9月 新日本製鐵大分労組 執行委員  
1996年9月 同 書記長  
2000年9月 新日鐵労連 常任中央執行委員  
2004年9月 新日本製鐵大分労組 書記長  
2006年9月 基幹労連 事務局次長  
2010年9月 新日本製鐵大分労組 組合長  
2014年9月 基幹労連 事務局長  
2017年9月 同 中央執行委員長 (現)、  
金属労協副議長 (現)  
2017年10月 連合副会長 (現)

れた故草野忠義氏が何かの場面で語られた言葉。「労働運動は理想を追い求めるものである。常に夢とロマンを持ち続けなければならぬが、その一方で現実を見据えることも忘れてはならない。この二つは一見矛盾するようであるが、このバランスがなければ国民も組合員も同意は得られない。」

過去を見据え、失敗に学び、確実な実践につなげる努力は個人も組織も忘れてはならない大切なこと。仲間の安全と健康を基軸に「常に人を真ん中に据えた職場原点の好循環の追求」に向け、己を振り返りながら次代につなげる運動を進めていきたい。

ご安全に